

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00886

研究課題名(和文)日本人大学生英語学習者への会話指導における協働創作活動を統合した教育法の提案

研究課題名(英文) A proposal of a speaking/writing integrated instruction method to teach English conversation to Japanese EFL learners

研究代表者

竹田 らら (Takeda, Lala)

昭和女子大学・全学共通教育センター・准教授

研究者番号：80740109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、チャット形式作文を日本人英語学習者への指導に採り入れる前後での他者反復(相手の発話全体かその一部の反復)に見られた変化と、相手の質問への応答や理解確認と非言語行動との関係を分析した。一連の研究により、チャット形式作文採用後は、英語の表現が上手く使えず、日本語に戻る例も散見されたが、質問への回答量と内容が膨らみ、聞き手による他者反復の数が減少するなど、一定の効果を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題の研究成果は、以下の点で学術的意義がある。(1)日本人英語学習者への指導法として、会話で不可欠な瞬時のアウトプットを得意としない学生に対し、語句を思い出させて表現を組み立てられることを実証した、(2)非言語行動にも目を向けた会話の指導法を開発する重要性を提言した、(3)スピーキングとライティング双方の視点を持つことで、文脈や場面に応じて自発的に発信していく力をどう育むかに対する解法が得られた。

研究成果の概要(英文)：This project analyzed the differences observed in the allo-repetition (the entire or partial other-initiated repetition) before and after the adoption of chat-style composition in teaching English to Japanese learners of English and the relationship between the response to questions or confirmation of understanding and nonverbal behavior. The results showed that, although there were some cases where students were unable to use English expressions well and reverted to Japanese after adopting chat-style composition, the research principal found specific effects, such as an increase in the volume and content of responses to questions and a decrease in the number of repetitions by the listener.

研究分野：中間言語語用論

キーワード：英会話指導 創作文活動 チャット形式作文 非言語行動 相互行為 他者反復 基盤化 語用論的側面

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

従来の英語教育の学問分野では、学生の習熟度に合わせ、文脈や場面に応じて自発的かつ協調的に発信するための教育を提供できていないために、半ば面談調の一方向の会話に終始し、英語による会話をより双方向に、かつ、円滑に行うことに難しさを感じている事例が多く見られた。

この原因を考えた時、大学の英会話教材では、発話行為ごとに章が組まれており、そこにある会話例の型に従った役割演習を促すような内容が少なくない (Harmon et al., 2016; 重光・岩田, 2017)。また、役割演習で習得したものが一時の型に終わってしまい、変化していく状況に応用しきれないことで、第一言語による会話で発揮されている自律性や自発性が薄らいでしまう。さらに、日本語を介して英語に直すことに慣れている学生には、ある程度の内容を、短時間で間違いのない英語にして考えなくてはならないといったプレッシャーを感じてしまうようだ。これは、研究代表者が行った、日英語の会話分析を通して英語会話の特徴への気づきを醸成し、短時間でより自発的に表現させる創作文活動を採り入れた授業にて、学生が示した感想である。この感想は、英語で会話させても、相手と心地よく進められたという思いには至らず、英語への苦手意識を高めてしまう可能性の暗示と言えるのではないか。

以上の状況に対し、文脈や場面に応じて自発的に発信するための教育を提供することは、東京オリンピック控え、ますます国際的なコミュニケーションが重要視されている時期において、英語による会話をより双方向に、かつ、円滑に行うことを実現させるために、学術的に推進すべき重要な研究課題という位置づけが可能であった。

2. 研究の目的

本研究は、英語による会話をより双方向に、かつ、円滑に行うための方法論の模索を目的とする。この目的を実現するため、大学生が対象のスピーキングの教育にライティングを採り入れて、その協調性と表現力を高める方法を検証するという手法を適用する。そのことで、英語で会話を自発的に進めていく際に、比較的低い習熟度の学生から高い習熟度の学生まで幅広く応用でき、発信力の向上に貢献する指導法の開発への手立てを得ることができる。また、会話教育においてスピーキングとライティング双方の視点を持つことで、文脈や場面に応じて発信していく力をどう育むかに対する解法を得ることができる。

さらに、本研究で行う分析と考察を通じて、「日本人学習者が、相互行為としての会話を英語で自発的に進めていくことができない問題をどのように解決するか」という問いに対する解答を模索することも目的である。従って、いわゆる英語の習熟度が低い学生も、より内容を膨らませた発信が可能になり、即興性重視の会話教育では意識されなかった相互行為による協調性や内容の関連性の大切さを学生に深く認識させられるのではないだろうか。また、スピーキングとライティング双方の視点を取って発信能力を見ていく方法を提起することで、リスニングとリーディング双方の視点を持つ受信能力の教育への応用と、そこから発信能力の教育にどう繋げていったら良いかに関するより充実した議論をもたらすことも期待されよう。

3. 研究の方法

本研究では、日本人英語学習者の会話にみる話し手の交替のあり方に着目して、その習得に、思いつくままに書かせながらも相互行為的性格が強い創作文活動を採り入れ、会話教育にライティング活動を導入することの有効性とその方法論の検討を行った。

創作文活動については、野口 (2016) や田辺・岡田・大須賀・野口 (2017) が日本語教育で用いている「4人で、時間を決めてリレーする形式」が先行研究として挙げられるが、研究代表者は、会話指導へより直結できるものとして「2人で、即興性と相互行為性を重ねてリレーする形式」(以下「チャット形式作文」)を考案した。そして、日常生活に関わるテーマ(好きな食べ物や趣味など)や大学生活に関わるテーマ(中間試験やクラブ活動など)の下で授業中に実施して、チャット形式作文自体の成果と共に、会話における話し手の交替への成果に差が見られるかを分析、考察した。

当初は、会話指導でチャット形式作文がもたらす効果と学習者の習熟度との関係や、英語母語話者同士の会話と日本語母語話者同士の会話の比較で気づきを醸成させる指導方法との混合が

学習者に与える効果の有無も検証対象にする予定であった。しかし、実際のデータ分析を通じて、チャット形式作文が会話指導にて大切な「相互理解」を養う教材であることが見てきたため、以下2つの問題を提起し、分析と考察を行うこととした。

- (1) 日本人英語学習者は、会話やチャット形式作文でどのように話題を展開させ、参与者間で理解を共有させていくか。
- (2) 会話指導にチャット形式作文を採り入れることは、日本人英語学習者にとって有効か。

上述の会話データもチャット形式作文データも、被験者は、東京都内の理工系大学に通う情報系科目を専攻する1年生で、いずれも、初中級レベルの英語クラスに所属する日本人英語学習者14組28名である。このうち、会話については、英語による3分間のやりとりをビデオカメラで録画し、ICレコーダーで録音した。その際、参与者側の緊張感を和らげるために、収録は4名を1グループとし、会話班2名と録画・録音班(録画・録音とタイムキーパー)2名に分かれてもらい、規定の時間が来たらその役割を交代させた。なお、学生にとって話しやすい環境を作る意味で、「趣味」「好きな食べ物」(2018年6月収録)と「前の年で最も良かったこと」(2019年1月実施)をテーマに設定した。

一方で、チャット形式作文については、毎回の授業終了5~10分前に、所定のテーマを与えてペアで1枚の紙を回覧させ、相手の発話文を受けてなるべく長くやり取りが続くように指示を出した上で、会話のように書き連ねた原稿を収集した。その中で、「夏休みの予定」(2018年7月実施)と「中間考査について」(2018年10月実施)をテーマにしたものをデータとして分析し、複数の研究発表や論文に発表した。なお、被験者同士のやりとりをより円滑にするため、最小限にとどめることを条件に、辞書の使用と日本語による相談を認めた。

4. 研究成果

はじめに、日本人英語学習者による話題展開と理解共有について、会話とチャット形式作文における反復表現に焦点をあてた。その際、参与者間の相互理解を確定していく過程(基盤化)(Clark 1996)の概念を援用した。分析の結果、会話では、1つの話題に対しその内容を確認する反復が、チャット形式作文では、関連語句による話題継続のための反復が見られた。

以下の会話例は、理解を確認して進行させていくための他者反復を含む。

例1 (Salmon)

- 01 A: What is your favorite food?
- 02 B: My favorite food is wataame, ah, [cotton candy].
- 03 A: [Wataame].
- 04 B: Cotton candy.
- 05 A: Cotton [candy].
- 06 B: [Yes. I, If I went to festival, I would buy it.
- 07 A: Un, oh.
- 08 B: How about you? How about you?
- 09 A: Um, I like sushi.
- 10 B: Sushi.
- 11 A: Sushi.
- 12 B: Sushi tabetai. Sushi, what sushi, what kind of sushi do you like?
- 13 A: I like, um, salmon.
- 14 B: Salmon.
- 15 A: Un, Salmon.
- 16 B: Salmon is Maguro in Japanese. Are, magu, no, no, no Maguro.

2行目の“wataame”や“cotton candy”を、3行目と5行目でAが他者反復しているが、これはBの好物に関するキーワードへの理解を示し、Bがいかにわたあめ好きかを説明する6行目につなげている。同様のことが、Aの“sushi”を互いに反復して、12行目の“what kind of sushi do you like?”につながる10-12行目、Aの“salmon”を反復しあって、“salmon”の日本での呼び名を出して話を展開させようとする14-16行目にも見られる。

一方で、例2は、夏休みの予定に関するチャット形式作文である。

例2 (Disney Sea)

- 01 C: What are you going to do this summer?
02 D: I think I want to go to Disney Sea.
03 C: Wow, what do you ride attraction?
04 D: I want to ride rasing spirit(s).
05 C: It is turning around 360°, isn't it?
06 D: Yes, it is. What do you want to ride there?
07 C: I want to ride "Jenie's Masic lump theater" and "turtle talk."
08 D: Oh, It's great I have never ride both. What are you going to do this summer?
09 C: I want to go to festival and eat cotton candy.
10 D: It's nice. Who do you go there with?
11 C: Please don't ask about it.

この例では、話題の一貫性を保つべく、関連する語句の他者反復で話題を継続させている様子が観察できる。具体的には4行目の“ride”・7行目の“want to ride”・10行目の“go”で、2人が夏休みにいきたい場所に関する話題を続けている。ただし、語彙の反復頻度は会話例より少ない。

このように、同じ反復表現でも、相互行為の形態によって出方が異なることから、反復表現の語用論的側面に関する学習内容を教室外で生かす際に、授業で扱わない「コンテクストに応じた相互行為」について、各学習者が把握し対応していく必要性を提起した。

次に、日本人英語学習者への会話指導にチャット形式作文を採り入れる有効性に関する成果を示す。質問に答える発話、あいづちとして他者反復を使う方法、対話者の理解の確認に焦点をあてて英語での語用論の面で円滑な会話を管理する方法における類似点と相違点を定性的に分析した結果、チャット形式作文を採用した後に録画・録音された会話では、質問への回答量と内容に発展が見られ、聞き手による他者反復の数がわずかに減少していた。

以下の会話例には、チャット形式作文を採用する前のやりとり（例1）でも登場した学生Aが含まれている。

例3 (Saitama Stadium)

- 01 A: What were your best things last year?
02 E: I met many persons. And I could become many friends. How about you?
03 A: My best things is Saitama Stadium. And I watched soccer game. Enemy is Argentina. It was so good game. What did you do with your friend?
04 E: I watched baseball game three times.
05 A: What baseball team do you like?
06 E: I like Chiba Lotte Marines. Do you know? And I like soccer. My favorite team is Yokohama F Marinos. Do you know?
07 A: Yeah. My favorite team is Kashima Antlers.
08 E: Good team.
09 A: ACL is good game.

例1では単語レベルの反復が多かったAであるが、例3では質問への答えが増え、その内容にも発展が見られた。例えば、2行目の“How about you?”は、1行目の質問に答えたEが、その返しとして行ったものであるが、1文以上の発話で回答している。ここでAは、主な回答“My best things is Saitama Stadium.”に（1）埼玉スタジアムでやったこと、（2）試合での相手、（3）試合の印象の3つを加え、2行目のEの発話を膨らませるような質問をしている。Eは、友人と何をしたかを説明した後（4行目）、Aからの質問を受けて、好きな野球チームと「好きなスポーツ」「サッカーチーム」という2つの情報を追加したのち、野球チームとサッカーチームに関するAの背景知識を“Do you know?”を使って確認した。これまで触れた会話よりも単語や文が多い情報交換を含む本例では、AもEも話題の一貫性を保つために4回の反復（「野球」4・5行、「チーム」5・6行、「好きなチーム」6・7行、「チーム」7・8行）を使っていた。このように、自分の発言を発展させて説明するコメントを加えることで、語用論的管理能力を向上させた。また、反復を減らし、

関連情報や補足情報を挿入して内容を充実させることができた。

一方で、ペアによっては、英語表現が見つからなかったために、日本語に戻したやり取りも散見された。当事者からやりとりの掲載について許可が取れなかったため、会話例を紹介することは差し控えるが、やりとりで見られた特徴は以下の通りである。男子学生 (MS) は、動詞の過去形に関する文法の間違いに気づいた時、「あっ、違う」という日本語を使った。しかし、適切な英単語や過去形の正しい形を見つけられなかった。また、日本語に戻った例として、“outdoor” の意味を尋ねる相手に、「なんちゃら」「わかんない」を使って野外活動を表現しようとした。この会話は、途中で単語の具体的な説明や、MSに名詞を使わせて詳細を明らかにするような質問もなく、膨らませることができなかった。それでも、一言で済ませるのではなく、発話をなんとか前に進めようとする姿勢は観察された。

以上の結果から、チャット形式作文は、できるだけ多くの英語を使って相手と「対話」をするように促すことで、会話指導に貢献できると結論づけた。チャット形式作文でのやり取りを会話に応用させる試みを通じて、文法的・文脈的に間違った表現であっても、相手の発話に対しよりまとまった語句や文を使おうとしたペアが増えたことは明るい兆しである。

今後は、異なる習熟度・学年・専攻の学生によるデータをより多く収集し、チャット形式作文を採り入れないリーディングとライティングのコースのみを受講している学生たちも含めて、より広い視野での分析と考察が求められる。

注

文字化の記号 (Du Bois et al., 1993; 串田, 2015; 竹田, 2019)

[文字 参加者同士の発話が重複する場所

文字 他者反復をもたらす反復源となる語句

文字 反復源を用いた他者反復の語句

・ 下降調の抑揚 , 継続を示す抑揚 ? 上昇調の抑揚

引用文献

Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.

<https://doi.org/10.1017/CBO9780511620539>

Du Bois, J., Schuetze-Coburn, S., Cumming, S., & Paolino, D. (1993). Outline of discourse transcription. In J. Edwards & M. Lampert (Eds.), *Talking data: Transcription and coding methods for discourse research* (pp. 45–89). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Harmon, D., Syquia, J., & Giordano, M. (2016). Utilizing pragmatic speech acts: The missing element to practical English teaching. Paper presented at *JACET 55th International Convention*, Sapporo, Japan, on September 1st.

串田秀也. (2005). 「会話における参加の組織化の研究 : 日本語会話における『話し手』と『共- 成員性』の産出手続き」 京都大学 博士学位論文.

野口潔. (2016). 「日本語学習者によるリレー方式ストーリー・ライティングーフィードバックから探る教育的効果一」 *Proceedings of the 30th Annual Conference at Southeastern Association of Teachers of Japanese*, 90-117.

重光由加, 岩田祐子. (2017). 「聞き手の役割に主眼を置いた英会話能力の育成ー教材と指導法」 大学英語教育学会 (JACET) 第 56 回国際大会 シンポジウム (8 月 30 日実施)

竹田らら. (2019). 「英語での会話力向上のためのチャット形式作文の導入と語用論的側面の指導」 『日本語用論学会 第 21 回大会 発表論文集』, 221-224.

田辺和子, 岡田彩, 大須賀茂, 野口潔. (2017). 「リレー式ストーリー・ライティング」 『第 23 回ブリントン大学日本語教育フォーラム予稿集』, 59-73.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 TAKEDA, Lala	4. 巻 33(2)
2. 論文標題 Overlaps in collaboration adjustments: A cross-genre study of female university students' interactions in American English and Japanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Pragmatics [Quarterly Publication of the International Pragmatics Association (IPrA)]	6. 最初と最後の頁 285-312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/prag.21009.tak	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAKEDA, Lala	4. 巻 -
2. 論文標題 Exploring implicit and explicit teaching methods in EFL education: A cross-genre analysis of topic management through overlaps (招待あり)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Lala, Takeda and Megumi Okugiri (eds.) A Pragmatic Approach to English Language Teaching and Production	6. 最初と最後の頁 143-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田らら	4. 巻 15
2. 論文標題 「教えられること」とその先にあるもの： 相互行為の外国語教育にみる言語の「適応」と「共有」（全体趣旨）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22回 大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 231-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田らら	4. 巻 15
2. 論文標題 日本人英語学習者の話題展開と理解構築： 会話とチャット形式作文での反復表現を比較して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22回 大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 235-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAKEDA, Lala	4. 巻 58
2. 論文標題 Co-occurrence of linguistic and non-linguistic behaviors: Single case analysis of Japanese EFL learners' allo-repetition and gazing (招待あり)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in English and American Literature	6. 最初と最後の頁 185-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TAKEDA, Lala	4. 巻 -
2. 論文標題 Chat-style writing in teaching conversation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PanSIG Journal 2021	6. 最初と最後の頁 279-287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAKEDA, Lala	4. 巻 -
2. 論文標題 Elicitation of mutual understanding and achievement of coherence: Allo-repetition in Japanese EFL speaking and chat-style writing interactions	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Lee, Cynthia (ed.) Second Language Pragmatics and English Language Education in East Asia. (Oxford: Routledge)	6. 最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田ら	4. 巻 14
2. 論文標題 英語での会話力向上のためのチャット形式作文の導入と語用論的側面の指導	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語用論学会第21回 大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 221-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田らら	4. 巻 14
2. 論文標題 『相互行為』と語用論:社会的関係の動的性質に関する実践研究と教育への応用 (全体趣旨)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語用論学会第21回 大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 205-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田らら	4. 巻 該当なし
2. 論文標題 基盤化と語用論教育 日本人英語学習者のチャット形式作文と会話での反復から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流企画シンポジウム『相互行為と語学教育』予稿集	6. 最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 相互行為にみられる言語調整機能 (趣旨説明)
3. 学会等名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流企画シンポジウム 第3回 相互行為と語学教育
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TAKEDA, Lala
2. 発表標題 Topic development through allo-repetition in EFL-speaking and chat-style writing: From the viewpoint of dependency and creativity in context
3. 学会等名 AILA World Congress 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TAKEDA, Lala, Megumi OKUGIRI, Naoko OSUKA, Pino CUTRONE, Keisuke IMAMURA, Misa FUJIO, Ivan BROWN, Ayaka TAKEUCHI, John CAMPBELL-LARSEN
2. 発表標題 Foreign language or lingua franca: Examination of the application of research outcomes to language education through pragmatics
3. 学会等名 The 14th Annual Convention of JACET Kanto Chapter
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TAKEDA, Lala
2. 発表標題 A provisional suggestion on linguistic and cultural inclusion in the co-occurrence of verbal and non-verbal cues: The case of overlaps
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (IPrA 2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TAKEDA, Lala
2. 発表標題 Chat-style writing in teaching conversation
3. 学会等名 2021 JALT PanSIG Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹田 らら
2. 発表標題 「他者反復にみる言語的『重なり』と非言語的『重なり』の共起：日本人英語学習者のデータから」
3. 学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画シンポジウム 第二回「相互行為と語学教育」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TAKEDA, Lala
2. 発表標題 Co-Occurrence of Verbal and Non-Verbal Cues in Grounding: A Study on Allo-Repetition and Gaze in Japanese English as a Foreign Language (EFL) Interaction
3. 学会等名 JACET 58th International Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 日本人英語学習者の話題展開と理解構築：会話とチャット形式作文での反復表現を比較して
3. 学会等名 日本語用論学会第22回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TAKEDA, Lala
2. 発表標題 Multimodality in overlaps and pragmatic awareness
3. 学会等名 2018 JALT PanSIG Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 英語での会話力向上のためのチャット形式作文の導入と語用論的側面の指導
3. 学会等名 日本語用論学会 第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 基盤化と語用論教育：日本人英語学習者のチャット形式作文と会話での反復から
3. 学会等名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流企画シンポジウム『相互行為と語学教育』（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 TAKEDA, Lala and Megumi Okugiri (竹田らら・奥切恵)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 A Pragmatic Approach to English Language Teaching and Production	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------